

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu



放送大学静岡学習センター所長

本多隆成氏

Takashige Honda



経歴

1942年、大阪市に生まれる。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。1973年、静岡大学人文学部講師。同助教授、教授を経て、2008年、定年退職。現在、放送大学静岡学習センター所長、静岡大学名誉教授。主な著書に、「近世初期社会の基礎構造」、「初期徳川氏の農村支配」、「近世東海地域史研究」など。

新田開発や用水整備など農村を重視した家康

前近代（明治維新以前）の日本社会では、生産の基本は農業、それも水田稲作にあった。

このため、領国体制の強化を図ろうとする戦国諸大名は、たとえば釜無川治水のいわゆる信玄堤に代表されるように、新田開発や用水の整備にこぞって意を用いてきた。家康もまた早くからこの問題に対応し、たとえば天正十五年（一五八七）と翌年には、富士郡下方の厚原・久爾両郷（富士市）に対して、つぎのような指示を与えている。

すなわち、前者では、田成地（水田にした土地）の場合は低い年貢率の畠年貢並とし、新開作の田畠の場合は二年間年貢を免除するというように、開発の奨励を行っている。

後者では、厚原・久爾両郷の掛樋について、厚

原郷の土豪植松右近に二〇貫文を扶助してその管理を命じている。この両郷の掛樋は重要な用水として、その後、近世（江戸時代）を通じて維持されたのであった。

とりわけ重要な施策は、天正十七年二月から翌年一月にかけて実施された五カ国（三河・遠江・駿河・甲斐・南信濃）総検地であった。徳川氏直属の奉行人が検地の責任者になって、給人領（家臣の所領）・寺社領・蔵入地（直轄領）を問わず、村単位でいっせいに丈量検地が行われ、田畠一筆ごとに所在地・品位（田畠の等級）・面積・名請人（耕作者・年貢納入責任者）が把握され、検地帳に書きあげられた。

検地が終わった村々には、年貢・夫役の賦